
与えるということ。

あぼかりぷす？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

与えるということ。

【Nコード】

N7663X

【作者名】

あばかりぷす？

【あらすじ】

普通な生活をしていた少年が幻想入り。幻想入りしたときの最初の場所は森だった。普通の少年がいきなり妖怪や妖精が徘徊するような場所に投げ出され、いきなりハード設定で始まる。そんな話し。

一話（前書き）

以前 東方雷震紀 という名前で最初を少しだけ投稿。
いろいろと改良したい点があったので一度引き上げて再投稿します。

処女作なので、生暖かい目で見られるようがんばりたいと思います。

一話

1話

ジューーーーー……

その音は灼熱の炎によって奏でられている。

ああ……いい匂いだ。

今すぐにでも食べてしまいたいくらいに……。

焼いていると涎が止まらなくなりそうだ。

慎重に、焦がし過ぎないようにその光景を眺める。

焦げそうになったら それ を動かし焦がさないようにする。

ふふ……まともなのを食べるのも久しぶりだな。

そう思いながらニヤニヤしながら調理する。

まだかまだか、と絶妙なタイミングを計る。

そろそろ大丈夫だろう・・・最後の仕上げに入るとしよう

そう

俺は今・・・

焼きそばを作っているのだ。フライパンで。

いやー、久しぶりだなあ。

先月は本当に死ぬかと思った。まさかバイトの給料をもらってルン気分で家に帰ったら玄関に怪しいオッサンがいていきなり壺を押し付けてくるんだもんなあ。

最初は　はあ？　って思ってたあたり前に断ったが、なぜか俺の名前を知ってるし。しかも書類を押し付けられて読んでみたらこれまたなぜか俺名義で壺を買うことになってるし。

何がどうなってるんだ・・・？俺こんな壺買った記憶ないんだが・・・。

そう思いながら首を傾げるとオッサンが手紙を渡しながら

「これを読んでください」

という。これに壺購入の謎が書いてるのかと手紙を読む。
とても短い文だった。

ごめん、壺を買わされちゃった（笑）

俺、金ないからそっちに送っとくわ。

まあこれも経験と思って甘んじて払っておいてくれ

父

・・・・・・・・え、ちょ、おま。

おいしいいいあの糞親父iiiiiiii!!!!!!

なんで俺が払わないといけないんだよ！

（笑）じゃねえよ！どこに笑える要素がるんだよ！

つつかこんな経験したくねえよ!!!!

ではこれを・・・そう言いながら請求書を渡される。

壺なんて買えるわけないじゃん。

そう思った時期が俺にもありました。

払える・・・・・・・・ギリギリで払える・・。

図ったかのように今日もらった給料 - 1000円くらいの値段。

でもこれ払ったら・・・一ヶ月どうやって生きればいいんだ俺。

頬を引きつつしているとオッサンは何かを察したらしく、突然俺のポケットに手をつ込まれた。

ハッとなったその手を取ろうとするが時すでに遅し。

ポケットに突っ込まれた手はすでにオッサンの胸にあり、そしてその手には給料の入った封筒が握られていた。

俺が固まっているのをいいことに、封筒から金を出し、金を数えていく。

数え終わると1000円札だけ封筒に戻し、固まっている俺のポケットに封筒がねじり込まれる。

「たしかにお金は頂戴しました。では、これで」

去っていくオッサン。

それを眺め続ける俺。

ポケットの中には1000円札がこんなにちは。

近くには地面の上に置かれた壺が入ってるだろう木箱がこんばんは。

とりあえず……この壺を売ること考えよう。

「うん、何処にも名前らしい物が記入されてないし、作りも荒い。これじゃあ買い取ることはできないねえ」

「えっ」

「うちじゃちょっと」

「えっ」

「そんなことよりもお兄さん、いい体してるねえ」

「失礼しました。」

売れなかった。

家にも飾るかな。素人目にはわからないし。

両手で壺を持って家に帰宅する。

が、

予想できない事態が起こってしまった。

靴を無理やり脱ごうとして足を滑らした。そしてそのまま玄関前で
トラアアアアイ!!!!

粉碎される壺。飛び散る破片。顔面ダイブして顔を思いっきり打つ
俺。

悶絶しながら顔を上げ粉碎された壺に目を向けると、なにやらちよつとした白い煙がでていた。

でもすぐ消えたことで気のせいだと思い、飛び散った破片などを片付けるのだった。

それから次の給料日まではひたすら

モヤシ！モヤシ！！モヤシ！！！！

正直ヤバかった。栄養失調で倒れるかと思った。

なんでこんな生活をしなければいけないのか・・・

とりあえず親父が帰ってきたら顔が変形するまで殴ろう。それを胸に秘めてがんばってきた。

そしてとうとうモヤシ生活ともオサラバ！

モヤシ以外の野菜たっぷり！ソースの焼ける匂い！ソースが絡み合ってる麺！そして何より肉！最高すぎる！

自分の限界まで食おうと5人前も用意した。

さあ食おう！今すぐ食おう！

皿？そんなもんはいらない！フライパンを皿に直接箸で食ってやる！

台所を出てリビングへ続く扉を開く。

そこは・・・・・・・・森だった。

.....
は
？

一話（後書き）

東・・・方・・・？

二話

2話

森だ、森がある。

え、どゆこと？

後ろを振り返ってみるが、さっき開けたはずの扉がない。

いやちょっとまで、さすがにおかしいだろ。

少し思い返してみよう、何かヒントがあるはずだ！

やきそば作る↓リビングに行く↓森にいた↓＼（＾Ｏ＾）／

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

『リビングの扉を開いたらなぜか森にいた』

な…何を言ってるのか わからねーと思うが
俺も何をされたのかわからなかった……

実は リビングⅡ森 だとか
そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

と、とりあえずどうするべきか考えよう。何か役に立つ物はもって
ないか・・

服はいつもどおり部屋着用のジャージ

ポケットには何もなし

そして手にはヤキソバが5人前が乗ったフライパン

電波（そんな装備で大丈夫か？）

「大丈夫じゃない、問題だ」

いや、落ち着け

そうだ、
こういうときは素数を数えるんだ

1
2
3
4
5
.
.
.
つてこれはただの自然数だ！

2
4
6
8
10
...
これは偶数！

1 3 5 7 ・ もういいよ！これ奇数だよコノヤロウ！

0 1 , 1 0 , 1 1 , 1 0 0 , 1 0 1 . . . 2 進数 . . . だと? な

素数は・・・素数ってなんだ・・・？

こんなところでも頭が悪いとダメなのか！チクシヨウ！

他だ、他に何か落ち着けることを考えるんだ。

よし、こつ考えるんだ。

何も持たずに全裸で森に突撃するよりはマシだと。

ちよつと落ち着いてきた。

他人が自分よりも慌てているのを見ると安心して自分が落ち着くという話は本当かも知れないな。これは妄想だけだ。

とりあえず歩こう。ここに止まり続けても仕方ない。幸いまだ朝だ。

ヤキソバは非常食として慎重に食べていこう。

なあに5人前もあるんだ。ヤキソバが尽きる前に人を見つければいい。

……でも歩く前に少し食べよう。もうすでに腹が空いて仕方がないんだった。

2時間は歩いただろうか

少年移動中・・・

歩けど歩けど木、木、木

実はここは数十キロも森が続いていて、そして自分はその中でバカみたいにグルグルと歩き回っているだけじゃないか？

ってダメだ、何をネガティブになってるんだ。プラス思考で行こう
プラス思考で。

何か楽しいことでも考えながら進めばいいかもしれない。

さて何を考えようかな・・・楽しいこと楽しいこと・・・

そうだ、俺が小学校のころ家で親父とやった自分の誕生日のことを
思い出そう。

ああ、あの頃は楽しかったなあ

く回想く

「陽介え！お前今日誕生日だろ！仕事帰りケーキ買ってきてやる！」

「まじでか父ちゃん！俺、ちゃんといい子にして待ってるよー！」

「おう、待ってるよー！それじゃあ仕事行ってくる！」

「いつてらっしゃい！」

父帰宅

「今帰ったぞ」

「おかえりー！父ちゃん、ケーキ、ケーキは！？」

「おう！そんな物は買っていない……！」

「……………え？」

「あれは嘘だ！だって今日は エイプリルフル だからな！ワッハッハッハッハ！」

ワッハッハッハッハ

ワッハッハッハッハ・・・

く回想終了く

「何だろう、楽しいこと考えようとしたはずなのにすごいイライラしてきた・・・俺なんで誕生日のことなんて思い出したんだろうか・
・何で俺の誕生日は4月1日なんだよバカやるおおおおおおおお
おおおおおお！！！！！」

なんか無駄に叫んでしまった。疲れるだけなのに、何をやってるんだ俺は・・・

わはー

ん？今声が聞こえた気がする。

人か！もしかして人がいるのか！

周りを見渡すと右の方に黒くて丸い何かが浮いている。

そしてその黒いのがどんどん近づいてきてる・・・？

人・・・じゃないよな・・・？

そう思いながら黒いのが来るのを待つ。

そして1mほど離れた所で急停止。大きさはたぶん130cm前後・

・ ・ ?

よ、よし、話しかけて見よう。何か反応あるかもしれないし。

「あの、すみ」あなたは食べてもいい人類？」せん・・」

どうしてこうなった？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7663x/>

与えるということ。

2011年10月21日13時12分発行